

# 漱石文庫和漢書の保存状況について

大原 理恵

## はじめに

東北大学附属図書館漱石文庫は、同附属図書館貴重図書の中でも閲覧・撮影・報道機関の取材・展示等利用の希望が多い資料群である。そして、利用者からもしばしば指摘されてきたのが、資料の損傷の進行である。それゆえ、東北大学附属図書館では、マイクロフィルム・複製等を作成して原資料の負担軽減を図り、特に損傷の甚だしい資料については応急処置を施し、少しずつではあるが本格的な修復も行ってきた。

従来漱石文庫修復は、洋書について行われることが多かった<sup>1</sup>。これは、夏目漱石研究において、洋書の書込み等が注目されてきたことも要因の一つであろう。例えば、『漱石全集』（第27巻 岩波書店 1997年12月）の「蔵書に書き込まれた短評・雑感」なども見ても、洋書と和書の差は歴然としている。また、地震の際、洋書は落下により表紙が外れるといった被害が顕著であっ

たことにもよっている。一方、図書館が和漢書の修復を検討する場合には、漱石文庫は必ずしも優先される資料ではなかった。書物としては希覯本とは見なされないものが多く、理解を得にくい。漱石文庫和漢書の修復事業においては、普通書の価値の再検討も必要になってくる。

今回、夏目漱石の没後100年(2016年)・生誕150年(2017年)という節目の年を迎えて、漱石があらためて脚光を浴び、漱石文庫資料展示も続けて行われている。この機会に附属図書館では、和漢書の保存・修復事業を行うことを計画している。

そこで本稿では、現在の漱石文庫和漢書の保存状況について報告するとともに、関連資料についても紹介しておくことにしたい。

## 1. 保管の概況 —夏目家と東北帝国大学—

漱石文庫の修復が見送られてきたのは、漱石の手沢本に手を加えることに強い抵抗感があったことが大きな要因であったと思われる。挿入されている紙片、折られたページの角、汚れ、そのようなものからも漱石の何かを読み取ることができるかもしれない。そうした研究者の期待以前に、漱石の弟子たちが漱石生前のままに保存することを強く願っていた、という事情があった。

漱石文庫の成立については、すでに多くの文章が公表されている<sup>2</sup>が、ここでは、いかに漱石生前の状態を保持することにこだわり続けてきたかという点に留意

しながら、その経緯をたどりなおしてみたい。

漱石没後、漱石の長女筆子の夫でもある松岡譲は、その立場からも、夏目家住居を改築(大正8-9年)し書斎の漱石山房を移築するに当たり、元の状態を維持すべく細心の注意をはらった。

私は後世復元でもする事を慮り、日頃建築の事に関係している親戚のI・S氏に囑し、壊した旧屋の実測図を前もって作製するよう依頼しておいたのであるが、山房の分は一層入念に作図してくれるように頼んだのは言うまでもない。

『あゝ漱石山房』松岡譲 朝日新聞社 昭和42年 277頁

1 「漱石文庫の保存修復」小川知幸『木這子』31-3通巻116号 東北大学附属図書館 平成18(2006)年12月

2 「東北大学附属図書館「漱石文庫」の成立」原田隆吉『原田隆吉図書館学論集』雄松堂出版1996年 初出『図書館学研究報告』9 東北大学附属図書館 昭和51(1976)年12月・「漱石文庫」逸聞考」飛ヶ谷美穂子『文学』1-2(特集 反・漱石?) 岩波書店2000年3月 など。

一冊の本、一箇の器具文房具と雖も、私が作って置いた略図と蔵品・蔵書の目録によってならべたので、旧観そのままを実質的にも保存する事が出来、最初、移動するというので不安を抱いた口やかましい門下の先輩たちも、中に入って見て、あれこれ仔細に眺めまわし、これならもどおりで、昔同様の気分がするじゃないか、と悉くとまでは行かなくとも、先ず先ず満足で御機嫌であったのである。

同上 281頁

芥川龍之介「漱石山房の秋」(初出『大阪毎日新聞』大正9(1920)年1月1日「山房の中」)には漱石山房の書物を次のように描写する。

さうして東と北と二方の壁には、新古和漢洋の書物を詰め、無暗に大きな書棚が並んでゐる。書物はそれでも詰まり切らないのか、ぢかに下の床の上へ積んである数も少くない。その上やはり南側の窓際に置いた机の上にも、軸だの法帖だの画集だのが雑然と堆く盛り上つてゐる。

『芥川龍之介全集』第5巻 岩波書店 1996年 279頁

隣の客間の方には「雨漏りの痕と鼠の食つた穴とが、白い紙張りの天井に斑々とまだ残つてゐる」(同上 278頁)という状態であった、とも記されている。さらに、「漱石山房の冬」芥川龍之介(初出『サンデー毎日』2-2 大正12年1月「書齋」)には、移築後の状況が描かれている。

書齋は此処へ建て直つた後、すつかり日当りが悪くなつた。(中略)

しかしその外は不相変である。洋書のつまつた書棚もある。(中略)

天井には鼠の食ひ破つた穴も、……………

(中略)しかし先生は傲語してゐた。「(中略)天井は穴だらけになつてゐるが、兎に角僕の書齋は雄大だからね。」穴は今でも明いた儘である。

先生の歿後七年の今でも……………

『芥川龍之介全集』第9巻 岩波書店 1996年 271-273頁

保管環境は良好とはいえないが、漱石の弟子や遺族によって、蔵書の虫干が行われていた。

私の父が死んだのは、大正五年の暮であつたが、その死後二年ばかりしてから、家を全部改築する事になつた。併し、父の書齋だけは、記念として長く保存する為に、生前其儘の形で母屋から切り離し、庭の東南隅に移転させた。

それで、最初の頃は、毎年夏の暑い盛りになると、まだ学生の若い御弟子さん達を頼んで来て、夥しい蔵書の虫干しをするのが慣例になつて

居たが、そのうち、かうした連中も、おひ／＼学校を卒業して、それ／＼／何処かの先生になつたり、国へ帰つたりして仕舞つたので、段々、この御鉢が私等の方へ廻つて来た。尤も、虫干しなど、元来私は余り好かないから、いつも、遊びに来て居る友達を動員して、これを手伝はせる事にして居た。だから、その日も、廊下に一杯、足の踏み場もない程、黴臭い書籍を拵けて、カッと照りつける庭の木立の中で、

「博士嫌ひと夏目博士」夏目伸六

『父・夏目漱石』夏目伸六 文芸春秋新社 昭和31年 200頁

漱石生前から、漱石山房は書籍を保管する環境としては問題があつた。それでも書物を手に取る人がいる間は比較的良好な状態が保たれる。そうした閲覧者がいなくなれば、書籍の状態は急激に悪化するおそれがある。大正12年に関東大震災があり、いよいよ蔵書を含む漱石山房の維持が真剣に検討されることになったが、意見はまとまらず、漱石二十三回忌(昭和13(1998)年)には例年漱石の法会の後に行われてきた話し合いも行われなかつた。(「漱石二十三回忌」小宮豊隆<sup>3)</sup>)

遺蹟を理想的に保存する上からいふと、この書齋や客間は元の位置に復り、縁の下の砌には木賊が茂り、客間の窓からは芭蕉の広葉が見え、道を隔てる枳殻垣と縁との間の赭土の庭には、相当沢山の檜葉の植込が、昔の通に列んでなければならぬ。のみならず、玄関も、寝間も、茶の間も、すべて昔の儘でなければならない。

「漱石二十三回忌」小宮豊隆 p150

小宮は執拗に漱石生前の再現を夢想するが方策はない。しかし、さらに深刻な事態、戦災が迫ってきた。弟子たちとしては理想の幾つかを断念することでもあつたが、東北帝国大学による漱石文庫の購入は、疎開という意味が大きかつたのである。昭和19年2月25日受入登記終了。昭和19年2月、漱石遺墨展覧会と記念講演会が開催された。

#### ○漱石遺墨展覧会並記念講演会開催

国際文化協会並本学報国会教養部共同主催ニ依ル漱石遺墨展覧会ハ二月十一日ヨリ三日間図書館ニ於テ開カレ、又漱石記念講演会ハ二月十二日午後一時ヨリ本学講堂ニ於テ法文小宮教授、阿部教授及安倍一高校長ノ三氏ノ講演ガアリ、何レモ盛會デアツタ。

『東北帝国大学学報』290号 昭和19年2月 12頁

3 『漱石 寅彦 三重吉』小宮豊隆 岩波書店 昭和17年 所収。末尾に「一三・一二・二三」。

この時期に漱石の展示や講演会を行うことは、今は意味が異なる。この記事が掲載された『東北帝国大学学報』290号「彙報」でこの前後の記事見出しを見ると「戦時官吏服務令」「冬期鍛錬行軍」「軍事講演」「映画会開催」などで、映画会で上映されたのは「愛機南へ飛ぶ」「コノ弾丸」等であった。すべてを戦争に集中することを要求されていた。

出陣学徒ヲ送ツタ本学ハ教育ト研究トヲ更ニ更ニ戦争完遂ノ一途ニ集中シ、殊ニ研究ノ方面ニ於テハ従来ノ優レタル研究陣ヲ愈々戦争目的ニ集約シテ、国家焦眉ノ要請ニ直接応ヘツツアルノデアリマス。

「戦時官吏服務令」総長訓辞 同上

この展覧会・講演会については、原田隆吉氏の回想がある。「東北大学附属図書館「漱石文庫」の成立」原田隆吉（注2参照）によれば、法文学部阿部次郎教授は紋付袴（漱石の遺品）の正装で展示会場に臨み、講演会では「かなり自由奔放な話し振り」で聴衆を驚かせた。原田氏自身もまもなく軍隊に入る身であった。

受入時から、漱石文庫の書込みの重要性が認識されていたため、附属図書館では特に「漱石文庫閲覧内規」によって厳重に管理し、その意味は学生にも知られてはいたようである。

何故そのような格別の〔閲覧〕手続きが必要かということは、やがて漱石研究会（有志学生の会、指導は小宮先生）の会員である国文学科の先輩が教えてくれた。漱石の蔵書には鉛筆やペンの傍線や文章の書入れが沢山あり、しかもその内容が充実した重要なものが多い。閲覧者がもし不注意に自分でアンダーラインを引いたりしたら、漱石その人の記入と区別できなくなって取かえしが見つからない、というのであった。

## 2. 損傷状況

次に漱石文庫和漢書の現在の損傷状況について記す。和漢書については、一般には知られていない資料も多いので、その紹介も兼ねることにしたい。

「東北大学附属図書館「漱石文庫」の成立」原田隆吉  
『原田隆吉図書館学論集』 475-476頁

現在、附属図書館本館事務室において保管されている『漱石文庫図書目録 閲覧室備付』には「漱石文庫閲覧内規」が貼付されている（本稿33頁参照）。

漱石文庫閲覧内規 （昭和一九，七，七）

- 一、本文庫ハ教官又ハ其同伴者及ビ特ニ館長ノ許可ヲ得タルモノニ限り之ヲ閲覧スルコトヲ得
- 一、本文庫ヲ閲覧セントスル場合ハ備付ノ帳簿ニ氏名及閲覧書名ヲ記入スルコトヲ要ス
- 一、閲覧ハ所定ノ場所ニ於テ之ヲ行ヒ猥ニ館外ヘ帶出スルコトヲ得ズ学生ノ閲覧ハ特別閲覧席ニ於テ之ヲ行フモノトス
- 一、館外帶出ハ教官ニシテ特ニ館長ノ許可ヲ得タルモノニ限ル 帶出ハ原則トシテ当日限リトス
- 一、閲覧及帶出ハ執務時間内ニ限り之ヲ取扱フモノトス

しかし、漱石文庫で別置本（貴重図書）に指定されていたのは一部の自筆資料にすぎなかった<sup>4</sup>。昭和60年頃でも、附属図書館では漱石文庫全体を貴重図書とすべきではないかと議論をしている<sup>5</sup>。閲覧については貴重図書に準じた厳格さであったが、その他については徹底していなかったと推測される。それには受入時期の問題もある。「当時はもはや上製の書架が手に入りにくくなっており」荒づくりの書架が用いられた<sup>6</sup>。帙は普通書同様の簡易帙である。和書洋装本の箱は一般の図書と同様取り外したようである。

現在は漱石文庫全体が貴重図書に指定されている。

### ○帙の損傷

本体には問題はないが、帙が損傷・劣化していたり、そもそも帙が無いものが相当数見られる。

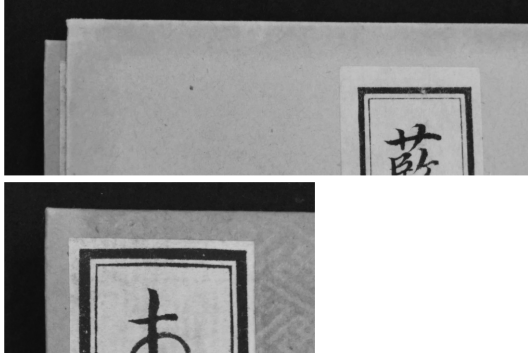
帙は、本来の帙が残されているもの、受入後早い時期に作製したと推測されるものがあり、破損や劣化が

4 「東北大学附属図書館和漢書貴重図書目録の刊行について（二） -昭和36年版『東北大学附属図書館別置本目録 増訂稿』刊行まで-」大原理恵 『東北大学史料館紀要』9 東北大学史料館 2014年3月 78頁

5 「東北大学附属図書館和漢書貴重図書目録の刊行について（三） -昭和63年 貴重図書選定委員会設置まで-」大原理恵 『東北大学史料館紀要』10 東北大学史料館 2015年3月 p60

6 「東北大学附属図書館「漱石文庫」の成立」原田隆吉 『原田隆吉図書館学論集』 478頁

目立つ。また、この初期作製の帙には小ぶりのものが見られ、資料が少しはみ出している場合もある。その場合、はみ出した部分が退色していることもある。

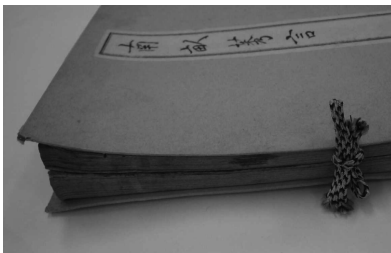


【あみたで 漱 1130】写真ではわかりにくいが左端が退色



【三十帖冊子 漱 1336】本来の帙が損傷

簡易帙では、帙の反りが目立つ場合もしばしば見られる。



【南畝莠言 刊本 漱 1453】

彼はある日（中略）懐から二冊つゞきの書物を出して見せた。それは確に写本であつた。（中略）

「是は太田 [マ以下同] 南畝の自筆なんだがね。僕の友達がそれを売りたいといふので君に見せに来たんだが、買って遣らないか」

私は太田南畝といふ人を知らなかつた。

（中略）

喜いちやんは斯う云ひつゝ私から二十五銭受取つて置いて、又しきりに其本の効能を述べ立てた。私には無論其書物が解らないのだから、それ程嬉しくもなかつたけれども、何しろ損はしないのだらうといふ丈の

満足はあつた。私はその夜南畝莠言——たしかそんな名前だと記憶してゐるが、それを机の上に載せて寝た。

「硝子戸の中」三十一

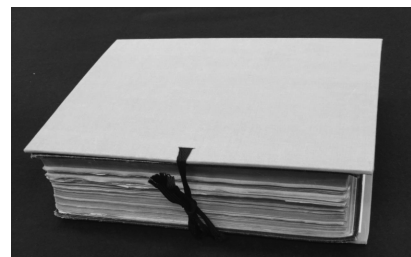
『漱石全集』第12巻 岩波書店 1994年 593-595頁

帙は、近年再度作製、追加作製されている。本館事務に、帙作製に関する書類が保管されているが、それによると、平成12年度の帙作製事業において、漱石文庫については101帙を作製しており、明細書によって資料名を確認することができる。次の資料はその一つである。



【参前参後 漱 1262】簡易帙ではなく通常仕様

漱石文庫では、洋装本についても簡易帙で本体を保護している場合がある。



【禪門法語集 續編 漱 1271】

#### ○本体の損傷

古典籍の場合、多少汚れや虫損があるのは、むしろ当然であるかもしれない。問題はその時期である。

その時若いW君の言葉はわたしの追憶を打ち破つた。

「和本は虫が食ひはしませんか？」

「食ひますよ。そいつにも弱つてゐるんです。」

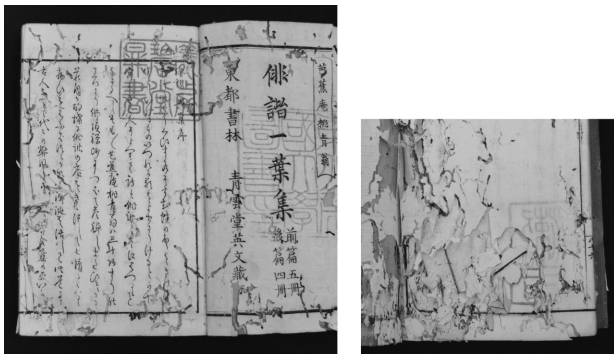
Mは高い書棚の前へW君を案内した。

「漱石山房の冬」芥川龍之介

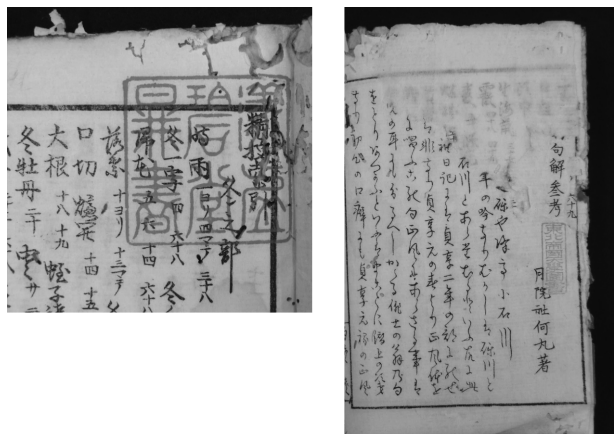
『芥川龍之介全集』第9巻 岩波書店 1996年 273頁



これが事実であるとすれば、漱石の没後に、虫による損傷が相当に目立っていたことになる。漱石文庫の和漢書古典籍を見ると、漱石の蔵書印が認められる部分が損傷している場合がある。漱石生前の状態の復元を目標とするならば、これらについては修復を検討することになるであろう。



【俳諧一葉集 漱 1162】



【芭蕉翁句解参考 漱 1179】

漱石の書簡<sup>7</sup>には書物の購入に言及したものがあ

る。序に何候一葉集といふ俳書は前後両篇にて壱円式拾銭位ならば高くはなきや又芭蕉句解も八十銭位で相当の価なりや両書共久留米で見当たれど高さう故買はなんだ安ければ今から取寄せる積りなり

明治 30 年 4 月 23 日 正岡子規宛書簡

小生近頃蔵書の石印一枚を刻して貰ひたり章曰漾虚碧堂図書と

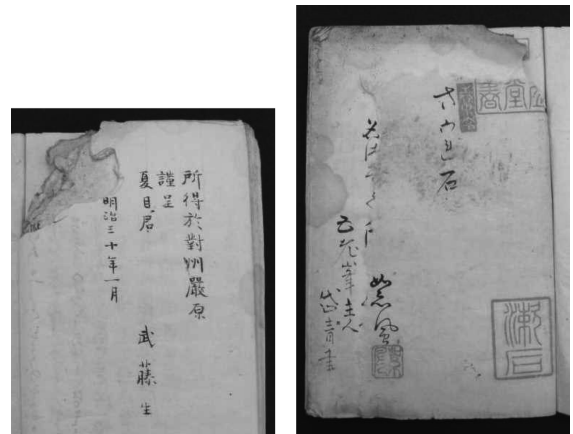
明治 29 年 11 月 15 日 正岡子規宛書簡

過日子規より俳書十数巻寄贈し来り候大抵は読み尽し申候過日願上候七部集及び故人五百題（活字本）は御面倒ながら御序の節御送願上候

明治 29 年 12 月 5 日 高浜虚子宛書簡

「夏目漱石 蔵書（和漢書）の記録 一東北大学附属図書館所蔵「漱石文庫」に見る一」佐々木靖章（『木這子』34-3 通巻 128 号 東北大学附属図書館 平成 21 年 12 月）「東北大学・漱石文庫所蔵「漾虚碧堂図書目録」翻刻と解説」一熊本時代における漱石と和漢書一」佐々木靖章（『解釈』63-1・2 解釈学会 平成 29 年 2 月）は漱石文庫和漢書の再評価を提唱しているが、特に、熊本の古書肆河島書店からの購入書群に注目している。

漱石は熊本で「漾虚碧堂図書」の蔵書印を作り、俳句に力を入れていた時期でもあり、友人に尋ねるなどして書籍を集めている。また友人から贈られた書籍も少なからず漱石文庫には含まれていて、漱石とその周囲の人々の交流を偲ばせる。それだけにそうした書籍の損傷は痛ましく思われる。



【され石 漱 1148】厳原で武藤<sup>8</sup>が入手し、漱石に贈ったもの

損傷が著しい場合、大学で作製した固い表紙で保護したものがあ



【對鶯句集 漱 1159】保護用の表紙と損傷状況

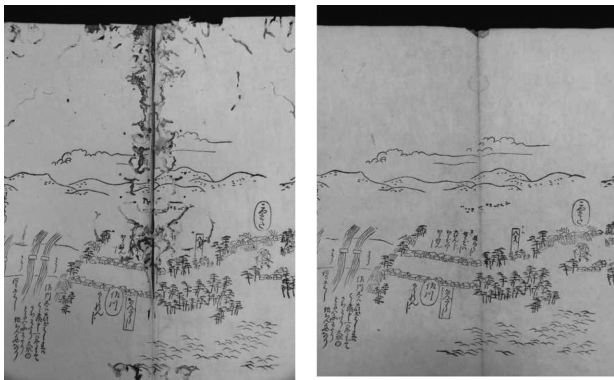
7 以下の漱石書簡の引用は『漱石全集』第 22 巻 書簡上 岩波書店 1996 年 3 月 による。

8 第五高等学校同僚の武藤虎太か。武藤虎太については、『夏目漱石と菅虎雄 一布衣禅情を楽しむ心友一』原武哲（研究選書 31）教育出版センター 1983 年 163 頁参照。

蔵書からも漱石と畏友狩野亨吉のつながりが浮かび上がってくる。例えば、次の写真は『東海道分間繪圖』であるが、左が漱石文庫（漱 1512）、右が狩野文庫から貴重図書に指定・別置されているもの（伊 6-513）である。



【東海道分間繪圖】



同じ箇所保存状態 漱石文庫（左）の虫損が著しい



【右 漱石文庫『東海道分間繪圖』表紙】



【左 狩野文庫『長崎大繪圖』3-9210-1 表紙】

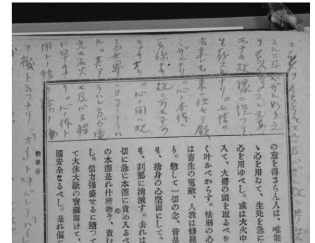
漱石文庫の『東海道分間繪圖』表紙に「尺蠖廬」と記されているが、同一人物によるとと思われる朱書・墨書が狩野文庫の資料にも見いだせる。



【狩野文庫『長崎大繪圖』3-9210-1・『長崎港全圖』3-9211-1・『改正長崎港内全圖』3-9212-1】

○和漢書洋装本の損傷

和漢書には近代の洋装本も含まれている。その修復方法は、洋書に準じ検討することが望まれる。

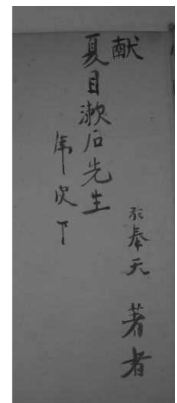


【禪門法語集 續編 漱 1271】 損傷状況と書き入れ

近代の和書洋装本の中には、著者の署名があるものも多い。ただし、漱石没後に夏目家に贈られたと推測されるものもある。また、漱石の序文があるものなど、漱石の近辺で作成されたと思われる書籍も少なくない。



【印象派以後 木下杢太郎 漱 1303】





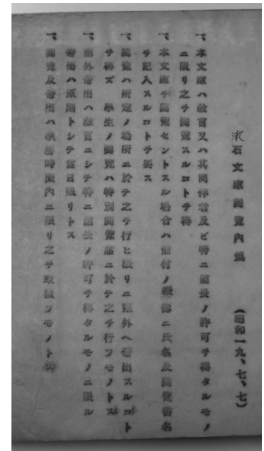
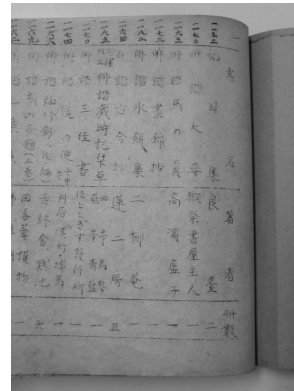
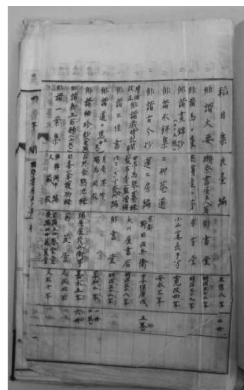
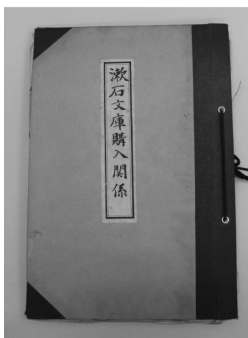
### 3. 漱石文庫基礎資料

最後に、附属図書館作成の漱石文庫目録・受入関係資料について紹介する。通常は利用に供していないものもあることをお断りしておく。

『漱石文庫購入関係』昭和18年—昭和23年

史料館所蔵 図書館/2014/B-62-8

※漱石文庫購入関係文書綴。目録を含む。「目録外圖書」「不明圖書」「目録ニアリテ實物無キモノ」等の一覧もあって、全蔵書の確実な移転は容易ではないことを物語っている。



『漱石文庫図書目録』【閲覧室備付】の和漢書目録と「漱石文庫閲覧内規」

『漱石文庫和漢書目録(漱石文庫図書目録)』東北帝国大学附属図書館 昭和19年7月

※末尾に「昭和十九年七月廿七日 常盤雄五郎作之」とある。カード目録を冊子とした手書の目録。袋綴。

『漱石文庫図書目録』東北帝国大学附属図書館

・謄写版

『漱石文庫図書目録』東北帝国大学附属図書館

【閲覧室備付】・謄写版

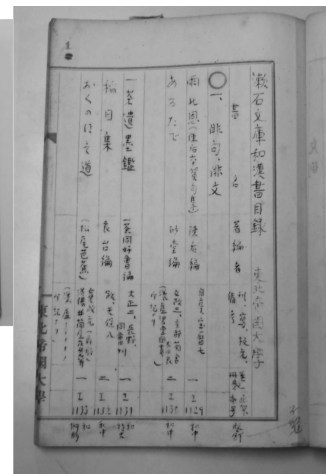
※内容は同じだが、後者は価格の部分がなく、漱石文庫の一貫番号を記入し「漱石文庫閲覧内規」(昭和一九、七、七)貼付。

※漱石文庫蔵書のうち次の2点は昭和19年9月11日に夏目純一氏より受贈。目録作成後であったと思われる、【閲覧室備付】末尾に「追加」として記入されている。

○克公之頌 (唐) 張之宏撰 包文該書 漱 1313-2

※変則的な請求記号(-2)は追加挿入したためであろう。

○数藤斧三郎君 (遺稿と伝記) 漱 1558

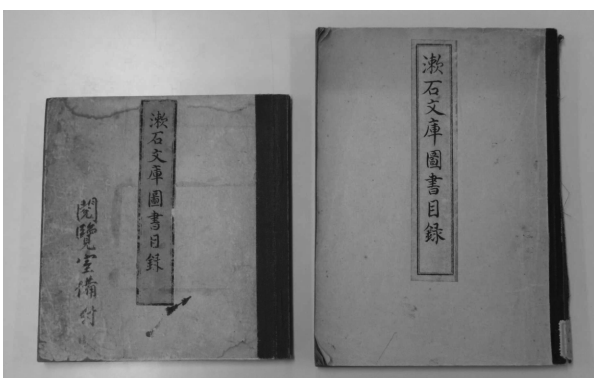
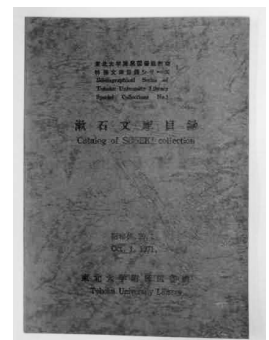


『漱石文庫目録』(東北大学附属図書館所蔵特殊文庫目録シリーズ

1) 東北大学附属図書館 昭和46(1971)年10月

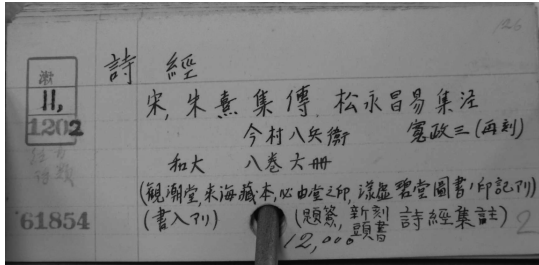
※カード目録により作成されたものであるが、特に傍線書入れについて

再調査し記述を増補している。和漢書において「(書入リ)」/「書入れあり」というように表記にゆれがあるのは、カード目録の記述に由来するものと、新たに追加した注記の記述方針が統合されていない部分が残ったものと推測される。この目録の「紹介 Introduction」4.には、今後図書館と



してなすべき課題が示されている。

※「漱石山房目録」と「漱石文庫」蔵書の差違については、「東北大学附属図書館「漱石文庫」のインスペクション」原田隆吉(『原田隆吉図書館学論集』雄松堂出版1996年 初出『図書館学研究報告』13 東北大学附属図書館1980(昭和55)年12月)に詳細な報告がある。



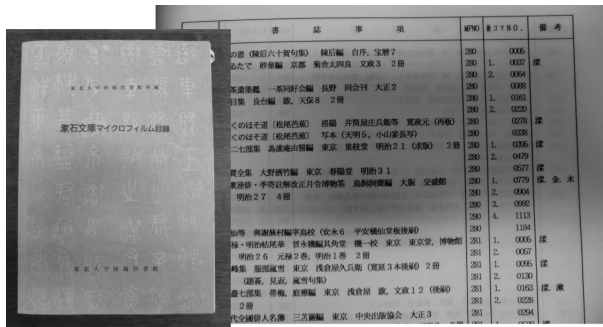
【漱石文庫カード目録】

『漱石文庫マイクロフィルム目録 東北大学附属図書館所蔵』東北大学附属図書館編 仙台市1997年

『漱石文庫自筆資料カラーフィルム目録 東北大学附属図書館所蔵』東北大学附属図書館編 仙台市

『漱石文庫自筆資料フォトCD目録 東北大学附属図書館所蔵』東北大学附属図書館編 仙台市

※仙台市と共同で行った漱石文庫マイクロフィルム化事業において作成。目録記述は簡略であるが蔵書印・書入等の注記もある。自筆・断片資料についても詳細な目録が作成された。



「漱石文庫目録の改訂更新リスト」石垣久四郎

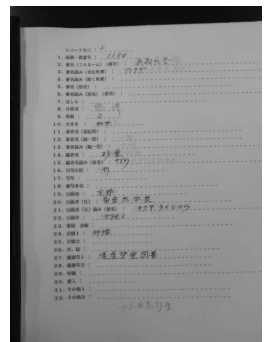
『東北大学附属図書館研究年報』31・32 合併号  
東北大学附属図書館 平成11(1999)年12月

「漱石文庫「身辺自筆資料及び漱石関係収蔵資料」目録リスト」石垣久四郎

『東北大学附属図書館研究年報』33 東北大学附属図書館 平成12(2000)年12月

※上に紹介した「東北大学附属図書館所蔵特殊文庫目録シリーズ1」の編纂に携わった石垣久四郎氏が、故高木忠氏(附属図書館情報サービス課参考調査掛)の書誌調査による修訂・上記マイクロフィルム番号等を加えて作成したものである。

このほか、草稿であるため非公開であるが、現在協力研究員室に、漱石文庫目録のデータベース化に備えて作成されたという(伝聞)手書の漱石文庫目録原稿が保管されている【写真】。書誌記述の修正について検討が重ねられた形跡がある。



摺筆するにあたり、漱石文庫目録の作成・改訂に尽力された方々に敬意を表します。

※引用にあたって傍点等を省略した場合がある。

(おおはら りえ, 学術資源研究公開センター・史料館助教, 附属図書館協力研究員)